

スリランカの仏教にみる善の実践

中 野 良 教

(駒沢女子大学)

I

人の善悪に対する考え方や価値判断が、その個人に定着し固定化する大きな要因のひとつは、家庭や地域社会といった環境の中にあることは、異論のないところであろう。特に、個人や家庭や社会が宗教と密接に関係している国々では、日常的に行われている宗教的な行事や活動の中に、特徴的な善悪の考え方を見いだすことが出来る。そこにおいて説かれる教えは、個人の経験などと微妙に絡みあいながら、その人の善悪の判断として構築されるのである。

そして、その善悪の判断が地域社会の中で集合化し、さらに長い年月をかけて文化的・宗教的形態として一般化するのである。

いま、現代仏教における善悪を考えると、経典類に現れた深遠なる教理を考察するばかりでなく、その国の社会でどのようにそれらの教えが受容されているかが重要となってくるのである。

本稿では、どのような教えが「善」として、繰り返し日常的に民衆の中で説示されているか、どのような「善」の実践方法があるのかというところを、スリランカの仏教の範囲で考察してみたいと思う。

さらに、宗教的な「善」「悪」を論ずることは、個人のレベルにおいて

は、その人の人生観や人間性のもっとも基礎となるもののひとつを考えることであり、他方、国や社会のレベルでは、その社会に特定の宗教がいかに精神的な部分で受け入れられているかを、検証する一助にもなるのである。その意味においても、仏教の善悪について考察することは有意義であると考ええる。

II

スリランカの仏教をみると、その所依の経典はパーリ聖典である。

パーリ聖典における「善」「悪」を意味する代表的な語をあげてみると、「善」は kusala, puñña などであり、「悪」は pāpa, akusala などである。

これらの語を使った用例をみるに、『ダンマパダ (Dhammapada)』の、
すべての悪しきこと (pāpa) をなさず、善いこと (kusala) を行ない、
自己の心を浄めること、——これが諸の仏の教えである。⁽¹⁾ (Dhp. 183)

sabbapāpassa akaraṇaṃ kusalassa upasampadā
sacittapariyodapanam etaṃ Buddhāna sāsanaṃ.

の偈に代表される。これは漢訳

諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教

の、いわゆる「七仏通誡偈」として東西に知られている。この偈が語るように、仏教の善悪の実践は道徳的な善い行為をなし、悪い行為を行わないで、専ら個人のこころを浄めることにある。そして、この理想が「身による悪行をはなれ、ことばによる悪行をもすてて、生活をすっかり浄められた」⁽²⁾ (Sn. 407) とする、釈尊の姿なのである。

スリランカの仏教徒のあいだでもっとも広く親しまれ拠り所とされている経典が、前掲の『ダンマパダ』である。この『ダンマパダ』に現れた「善」をさらにみてみると、

うず高い花を集めて多くの華鬘をつくるように人として生まれ死ぬべきであるならば、多くの善いこと (kusala) をなせ。(Dhp. 53)

といい、

人がもし善いこと (puñña) をしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。(Dhp. 118)
「その報いはわたしには来ないであろう」とおもって、善 (puñña) を軽んずるな。水が一滴ずつ滴りおちるならば、水瓶でもみたされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德 (puñña) にみたされる。(Dhp. 122)

と、多くの善をなし、さらにそれを積み重ねることを、繰り返しすすめているのである。そして、

善 (kalyāṇa) をなすのを急げ、悪 (pāpa) から心を退けよ。善 (puñña) をなすのにのろのろしてたら、心は悪事 (pāpa) を楽しむ。(Dhp. 116)

と、善の行為を積極的に行うことの重要性をも説いている。

スリランカの仏教では、僧たちは日頃の説法で、『ダンマパダ』を引用し、人々に善の実践をすすめている。「善行」に対する一般的理解が上にあげた偈に読みとれる。

さらに、スリランカ仏教のいわゆるパリッタ儀礼において『吉祥経 (Maṅgala-sutta)』は欠かすことの出来ない經典といっても過言ではない。夜を通して何度も誦されることもある比較的短いこの經典の一文に、

適当な場所に住み、あらかじめ功德 (puñña) を積んで、みずからは正しい誓願を起こしていること——これがこよなき幸せ (maṅgala) である。(Sn. 260)

とある。人の幸せの必要条件のひとつは、善い行いをし、功德を積むこと

であるという。この国の仏教徒は寺院のダンマサーラの宗教的雰囲気の中で、繰り返されるこの祝福のことば *maṅgala* に、自身の未来の成功や繁栄をみるのである。

それでは、このような「幸せの善い行い」は具体的に、どのような行為をいうのだろうか。『吉祥経』の中に先の文に続いて、

施与と理法になかった行いと、親族を愛し護ることと、避難を受けない行為、——これがこよなき幸せである。(Sn. 263)

と、説かれている。布施と正しい行を護持する人が幸せなのである。

同じくパリッタ儀礼に非常に一般的に呪されているところの經典である『宝経 (Ratana-sutta)』にも布施と幸せについて述べられている。

…かれらは幸せな人の弟子であり、施与を受けるべきである。かれらに施したならば大いなる果報をもたらす。この勝れた宝は〔つどい〕のうちにある。この真理によって幸せ (*suvatthi*) であれ。(Sn. 227)

施与を受けるべき比丘たちに対して、善男善女が布施をする。そのことの実事の先に、幸せという現実がもたらされるのであると説かれている。

この節では、スリランカの仏教徒が一般的概念としてどのように「善」を捉えているかを、所依聖典『ダンマパダ』から簡単ではあるが探り、他方、世俗的な護呪經典にある具体的な「善」の実践表現には「布施」の行為があり、その結果として幸福がもたらされると説くことが確認できた。

III

スリランカ仏教の通年の各種の供養の場において、比丘たちは比較的日常的に優婆塞・優婆夷に向かって、下記の『八大善 (*aṭṭha mahā kusala*)』を説き示す。

kaṭhinaṭṭha parikkhāram vasa dānam ca

uttamam buddhappamukha saṅghassa dānam
dhammassa lekhanam khetta dānam ca
Buddhassa patima karanam pi ca
karanam vaccakutiya aṭṭha puñṇani vuccare.

これを要約すると、次のようになる。

『八大善 (aṭṭha mahākusala)』

- (a) カティナ衣の供養 (kaṭṭhinapūjā)
- (b) 八要具の供養 (aṭṭha parikkhārapūjā)
 - 1～3. 三衣 (ticivaram)：僧伽梨衣 (saṅghāṭi), 鬱多羅僧衣 (uttarāsaṅgha), 安陀衣 (antaravāsaka)
 - 4. 鉢 (patta) 5. 剃刀 (vāsi) 6. 針 (sūci) 7. 腰帶 (bandhanam) 8. 水灑 (parissāvana)
- (c) 住処の布施〔造営・寄進〕(vāsadāna)
- (d) 仏陀を上首とした僧伽に対する布施 (Buddhappamukha saṅgha-
→ 仏舎利⁽³⁾ ssa dāna)
- (e) 聖典の書写・筆写 (dhammassa lekhadāna)
- (f) 田・土地の寄進 (khetṭadāna)
- (g) 仏像の布施〔建立寄進〕(paṭimākara dāna)
- (h) 便処の布施〔造築寄進〕(vaccakuṭiyakaradāna)

⇒以上は「八つの福德 (aṭṭha puñṇa) である」と説く。

福德の得られる善行の八つの具体的実践方法としての布施がよく示されている。

いま、ここに記した『八大善』(a)～(h)を基準に、スリランカの歴代の王が実際に行った布施、またはおこなったと伝えられている布施について、文献に現れた事例をあげてみる。その意味は、現代のスリランカの仏教徒

が善行として捉えている行為の、善き前例であるからである。

『島史 (Dīpa-vaṃsa)』では、スリランカ歴代の王の規範となる、阿育 (Asoka) 王の仏教に対する帰依の中に「王のなすべき姿」となる多くの善行が描写されている。

地上の主法阿育は…中略…〔彼の〕眷族、朋友、大臣、親族の衆に呼びかけたり「朕は大僧伽の集会に布施・施物を与うべし。能うる限り力の限り奉事せん…中略…講堂、牀座、水、侍者、進物、食物の用意をせしむべし…中略…城市に太鼓を打たしめ、街路を清掃して白砂並びに五色の花を撒き、此処彼処に華鬘の供物…中略…満水器を置かしめ、此処彼処に高し塔の〔建立に〕着手せしむべし」⁽⁴⁾ (島史 6-46, 47)

王は僧伽に対し、可能な限りの布施 (食事、進物) をする。それに伴うものとして場所 (建物、座所) と人 (給仕人) 等も用意提供する。さらに、仏塔の建立にも力をそそぐことは、多数の人足や莫大な費用を費やす国家事業というべき行為である。この記述を前掲の『八大善』にあてはめてみると、「僧伽に布施 (食事、進物) をする行為」は(d)、「講堂、牀座を提供する行為」は(c)にあたるであろう。「仏塔の建立」は(g)に分類できるであろう。これらの阿育王の善行はスリランカの諸王に受け継がれていくのである。⁽⁵⁾

スリランカの王統史の内、その初期においてマヒンダ (Mahinda) 尊者に遭遇し、仏教に帰依したデーヴァナンピヤ・ティッサ (Devānampiyatissa BC. 247-207在位)⁽⁶⁾ 王の場合はどのようなものであるか。『島史』は語っている。

天愛は先ず僧伽のために教〔法〕に價せる大雲林 (Mahāmeghavana) と名づくる園を奉獻せり…中略…「こは楞伽島に於ける最初の精舎なり…中略…」王は歎び感激し、合掌し、島の灯明者なる摩晒陀

に多数の華を贈れり。(島史 13-71)

同王の『大史 (Mahā-vaṃsa)』の記述では、

天愛帝須王…中略…第一は大精舎，第二は支提耶と呼ばれ，第三は美しき塔を先に建てたる塔波園，第四は大菩提樹栽植，第五は〔後日〕塔を建立するに〔適するよう〕善処したること，〔即ち〕大支提〔の所〕にて正覚者の頸骨のために，美しき石柱を建てたることはなり。第六はイッサラサマナ〔精舎〕，第七はティッサ池，第八は第一靈祠，第九は吠舎山と呼ばるる塔なり。⁽⁷⁾(大史 20-296)

といい、「精舎の建設」「仏塔の建立」「園や池の献上」など，スリランカ最初期の仏教に大変貢献している。これを『八大善』にあてはめてみると，順に(c)(g)(f)となるのではないか。

つぎに，マハーチューリ・マハーティッサ (Mahācūli-Mahātissa BC. 16-2 在位) 王についてみると，

マハーチューリ・マハーティッサは六万の比丘らに三衣を施し，彼は三万数の比丘尼にも亦〔三衣を施したり〕。…中略…この王は斯の如く信心を以て種々の善業を行い十四年の終わりに於いて天界に上れり。(大史34-454)

と，述べられている。天界に上る善行のひとつに比丘比丘尼に対して三衣の布施をなしている。この善の行為は，上の(b)の1～3の供養である。

さらに，クティカンナ・ティッサ (Kutikanna-tissa AD. 19-41 在位) 王の場合は，

クティカンナ・ティッサといえるマハーチューリの子は，支提山精舎に布薩堂を建立せしめ，堂の前に美しき石塔を造らしめ，其処に菩提樹を植え，〔其の周囲に〕大建築物を造営せしめたり。その時比丘尼等のために浴室を造築せしめ，…中略…囲壁を造らしめ…中略…池を

掘らしめ…中略…〔僧伽に与え〕刹帝利は二十二年統治せり。(島史
20-104)

とある。王は僧伽が次第に大きくなるにしたがって、比丘や比丘尼のために、「布薩堂の建立」「豪華な石塔の造立」「大規模な建築物の事業」「浴室の造築」「囲壁の建設」「池の造営」など、僧団周辺の環境整備を計ったことが窺える。この王がなしたこれらの行為は、先の『八大善』に照らしてみると、さながらそれぞれ(c)(g)(c)(h)(c)(f)に相当する善行といえる。

キッティ・シリ (Kitti-Siri 1780-1798在位) 王の善行は、下の『小史 (Culla-varṇsa)』によって知られる。

キッティ・シリと名づくる王…中略…が布薩堂を設け、これを四方來の僧伽に施せり。〔王〕はアサディサ本生物語の詩をシーハラ語にて書いて写さしめ、清浄心〔の王〕は信心よりして 夜に百千の灯明を点じ、齒舍利を迎えしめたり。カティナ衣を差別なくして布施するの功德なることを聞きて、彼(王)は毎年僧伽にカティナ衣の施を行い、青銅を以てかのアンギーラサの像を、王〔自らの〕等身大にして作らせ、…中略…精舎内に楽しき見事なる支提をも作らせたり。⁽⁸⁾(小史 101-591/592)

これをみるに、「布薩堂の建設」「本生經の書写」「カティナ衣の施与」「仏像の建立」「仏塔の造立」などを僧伽への施与としている。これらの布施は、上の順番に従うと(c)(e)(a)(g)(g)の『八大善』の布施といえることができる。

以上見てきたように、『島史』『大史』『小史』の仏教史詩の中には、歴代王の仏教に対して貢献したかずかずの業績が記載されている。歴代の王が行った僧伽への布施は、少なくとも、『八大善』を信奉する仏教徒たちにおいては、福德の得られる善行であった。諸王のなした善行は、また、スリランカの優婆塞・優婆夷の善き手本でもあるはずで、これらが基本と

なり、この国の仏教の信仰形態が形成されたと思われる。

IV

スリランカ仏教では、「善」の一般的理解のもとに「善」の実践方法としてどんなものがあるかをみてきた。「善」の実践方法の具体的なもののひとつは、『八大善』に代表される布施の善行である。その善の行為は福德を得、幸福を招くことと密接に関係しているのである。もちろん、「善の超越」としての出世間的善もあり得るであろうが、やはりいま述べてきたことが一般的なスリランカ仏教徒の善にたいする理解ではないだろうか。この仏教徒たちには「歴代の王の偉大な業績」というすばらしい手本が、いつも目の前にあるかのように精神的にも近い状態で存している。そして、宗教的儀礼の中で特にその重要性が説かれたことが、いまのスリランカ仏教の繁栄に繋がったひとつの原因と考えられる。

注

- (1) 中村 元訳『真理のことば』岩波文庫 1978年より。(以下『ダンマパダ』については、同氏訳)
- (2) 中村 元訳『ブッダのことば』岩波文庫 1984年より。(以下『スッタニパータ』については、同氏訳)
- (3) 「仏陀を上首とした僧伽……」は仏舎利を中心とした正統な僧伽と解釈することができるであろう。
- (4) 平松友嗣訳『南伝大蔵経』第六十巻より。(以下『島史』については、同氏訳)
- (5) 仏教儀式の演出の方法——太鼓を打ち、掃き清められた路に白い砂をまき、沢山の華で荘厳する——は、現在のスリランカで全く同じように受け継がれている。
- (6) 諸王在位の年代は、干瀉龍祥氏「セイロン王統年譜」(高野山大学・密教研究86) S 18. 9参照

- (7) 立花俊道訳『南伝大蔵経』第六十巻より。(以下『大史』については、同氏訳)
- (8) 立花俊道訳『南伝大蔵経』第六十一巻より。